



令和6年度
トピックス展 解説書

近代文学を **支** えた

てらだ

けん

寺田憲

と その 周辺



千葉県立中央博物館

NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA

開催にあたって

千葉県香取郡神崎町で醸造業を営む寺田本家の二十代当主の寺田憲（明治一五年～昭和一二年）は、明治から昭和初期にかけて文学界と深く関わりをもち、自らも短歌を詠むかたわら、伊藤左千夫、長塚節、土屋文明ら近代の歌人たちを物心両面で支えてきました。

寺田家には憲が彼らと交わした書簡類が多数残されています。その内容は作品に対する批評や歌の添削、私生活などの近況報告や雑誌刊行の資金依頼など多岐にわたり、それらは日本の近代文学史を考えるうえで貴重な資料群といえます。

寺田家では、今までこれらの資料を大切に保管してきましたが令和五年度にそれらを一括して中央博物館へ御寄贈いただきました。資料の詳細な分析や研究についてはこれからとなりますが、今回は新たに収蔵した資料の紹介をする速報展として、トピックス展を開催いたします。

開催にあたり貴重な資料をご提供いただきました神崎町の寺田本家をはじめ山武市歴史民俗資料館、香取市教育委員会の青木司氏にはあつく御礼申し上げます。

令和六年十月十九日

千葉県立中央博物館

目次

開催にあたって

第一章 神崎の造り酒屋「寺田本家」

1 利根川流域の醸造業

2 江戸・明治の利根川流域の文化的環境

第二章 文人 寺田憲

第三章 寺田憲と文人たちの交流

1 寺田家に残る文人等の書簡

2 寺田憲をめぐる人々

・伊藤左千夫

・土屋 文明

・長塚 節

・香取 秀真

・古泉 千樫

・斎藤 茂吉

・佐佐木信綱

・与謝野鉄幹

・高橋 刀畔

・牧野富太郎

おわりに ― 寺田家文学資料の意義 ―

展示資料翻刻

展示資料一覧

協力者・参考文献

【凡例】

・本冊子は令和六年度トピックス展「近代文学を支えた寺田憲とその周辺」（会期：十月十九日～十一月十七日）の展示解説書である。
・展示は米谷博（主任上席研究員）・渡瀬綾乃（研究員）が担当した。
・本書の執筆は米谷、編集は渡瀬が担当した。
・資料に付した番号は、巻末の展示資料一覧と対応している。

26 26

2
6
5
7

第一章 神崎の造り酒屋「寺田本家」

1 利根川流域の醸造業

江戸時代の利根川下流域は酒や醤油などの醸造業が盛んだった地域で、それは利根川という川船による輸送路の発達が大きく関係していた。江戸湾へ流れていた利根川が江戸時代の前期の流路の付け替え工事により銚子河口から太平洋へと注ぐようになると、そこに発達した水運により利根川は関東各地を結ぶ大動脈となった。

利根川流域には川の湊である河岸が形成され、そこでは商工業が発達し、活発な経済活動が営まれるようになる。とくに穀倉地帯の利根川下流域では醸造業が盛んであった。上方の酒どころ灘になぞらえて『関東

灘』と称されたという。その背景には小麦や塩などの原材料の調達や各地への製品の出荷など、利根川水運が重要な役割を担っていた。



6 寺田本家：令和6年9月撮影



5 明治時代の寺田家：明治27年（1894）『日本博覧図』

日本博覧図の初編に「清酒焼酎醸造業 寺田菊之助」として所収されている銅版画。神崎神社や利根川に面した神崎河岸の様子が描かれている。寺田家はレンガを取り入れた和風建築で、この図に見えるレンガの煙突は下部が現存している。



1, 2 通い徳利：昭和初期

小売りの酒屋から得意客へ貸し出した徳利。造り酒屋「寺田蔵」と銘柄酒「香取」の名が入っているので、蔵が小売店へ提供したものと思われる。

3, 4 寺田本家の銘柄「五人娘」・「香取」

五人娘は土屋文明が命名。ラベルの文字も文明の書。



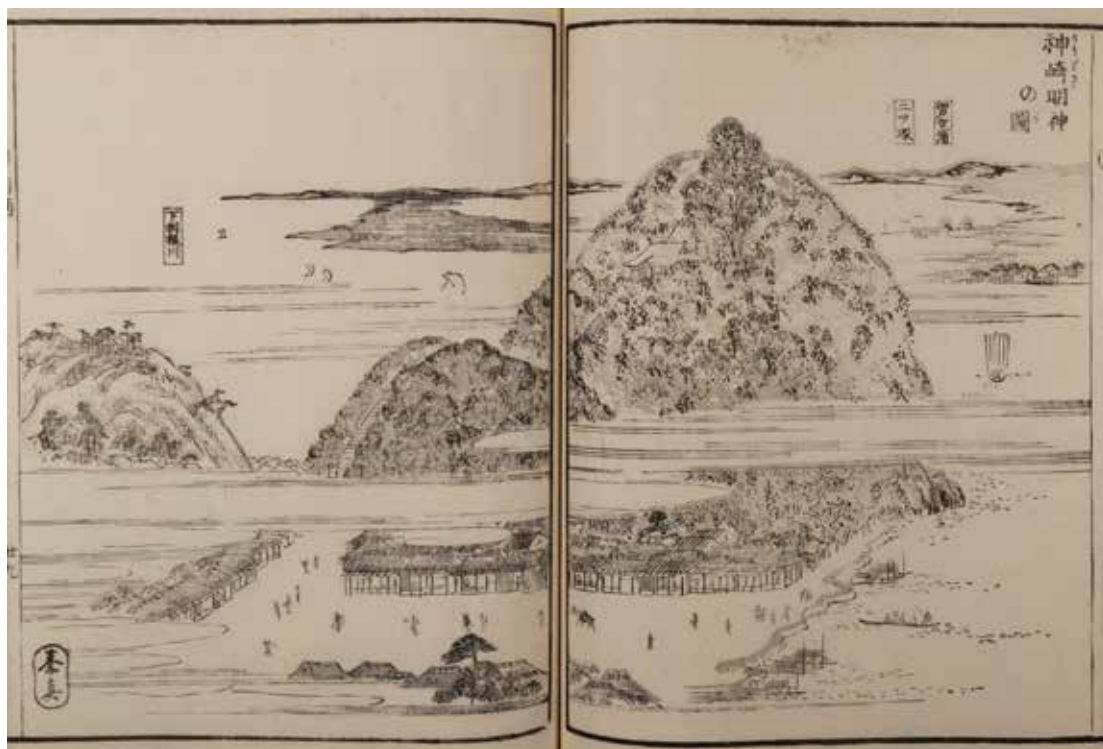
7 寺田家の経営に関する帳簿類など

寺田家は江戸時代の延宝年間（1673～81）から醸造業を営んでいたと伝えられる。古い記録類は残されていないが、明治から大正期にかけての酒造原料の受払簿や焼酎の売り払い簿などが残されている。また、民間金融組織である無尽の掛け帳や神崎神社の修復案内書などもあり、地域の中でも重要な立場にある家だったと想像される。

2 江戸・明治の利根川流域の文化的環境

利根川流域では、物資だけではなく人の行き来も活発で、江戸からの著名な文化人の来訪も多かった。俳諧の小林一茶、国学の平田篤胤、和算の剣持彰行等は利根川下流域を何度も来訪している。彼らの影響を受けた地方文人たちは各地で、特色ある地方文化を発展させていった。また地方文人どうしの交流も盛んで利根川流域文化圏ともいえるべき情報ネットワークが形成されており、寺田家もそうした文化的なつながりの中に存在していた。

明治初期に学校が制度化されると東京の大学が学問の中心となり、明治時代の中頃には地方文人たちも東京志向の様相を強めていく。寺田憲も東京で学んだ後、十九歳で神崎の寺田家へ婿に入るが、経営の傍ら中央歌壇との関係を持ち続け、神崎で創作活動を行っている。田山花袋の『田舎教師』は明治時代後期の利根川沿いの埼玉県の村を舞台に、経済的理由から上京をあきらめて教員となった文学青年の心境を描いているが、寺田憲の歌壇への経済的支援というのも地方文人が中央とつながる一つの形だったといえる。



8 神崎明神の図（『利根川図志』第5巻）

安政5年（1858）ナンジャモンジャの木が神社の「神木」として描かれている。
神社の下町並みが神崎河岸で、画面左のT字路を利根川方面に向かった四軒目の土蔵が寺田家。
『利根川図志』は相馬郡布川村（茨城県利根町）の赤松宗旦が編さんした全6巻の利根川流域の地誌。

第二章 文人 寺田 憲



11 寺田憲肖像写真
寺田家所蔵

出身

茨城県筑波郡谷田部町真瀬
(現茨城県つくば市)

生年・没年

明治一五年(一八八二)
昭和一二二年(一九三七)

茨城県筑波郡真瀬村の飯田新右衛門の長男として生まれる。父の新右衛門は茨城県会議員であり、明治四一年には衆議院議員となる。憲は東京の開成中学校を卒業後、明治三四年五月に十九歳で神崎町寺田菊之助の長女はなと婿養子縁組をして稼業を継ぐ。

憲が歌を詠み始めたのは、同郷の三歳年上の長塚節の影響が大きかったといわれる。長塚節の父源次郎も茨城県会議員であり、その関係から節と憲も交友を深めることになる。憲は明治三二年十七歳の時に佐佐木信綱主宰の竹柏会ちくはくかいの雑誌『心の花』に初めて投稿し、また後には与謝野鉄幹主宰の『明星』にも投稿している。明治三八年には高橋刀畔の勧めで正式に竹柏会に入会し、その後はここを中心に活動し昭和五年までに計三二七首を投稿している。明治四二年二十七歳に一三八首、明治四四年に一四〇首と二代後半が創作のピークであり、大正四年に長塚節が亡くなると創作活動も積極的には行わなくなっていた。

寺田憲の交友関係は文学史上著名な人物が多く、彼らとやりとした書簡は歌の添削など文学に関するもののほか、雑誌発行の資金の相談や近況の報告、酒の販売から家族の慶弔に関することなど多岐にわたり、寺田憲が彼らと深く交流していたことがうかがえる。また、歌の他に写真や利根川の川漁などの趣味があり、来客時には投網を披露し、獲れた鮭などを味噌漬けにしたりして伊藤左千夫らに送っている。



12 寺田憲使用の文机

桐製。縦58cm、横153cm、高さ30cm。
憲は家の中でもきちんとした服装をしており、人前でも楽な姿勢を見せなかったという。この机の前に姿勢よく座り、日々書き物をしていた憲の姿が想像できる。

第三章 寺田憲と文人たちの交流

1 寺田家に残る文人等の書簡

寺田家に残る書簡類を差出人ごとに示したのが次の表である。九〇点が残っている伊藤左千夫の書簡からは、個性的な左千夫の性格とともに、正岡子規の跡を引き継ぎ歌壇へ挑もうとする強い気持ちを読み取ることができる。

憲の旧友である長塚節ながしからの書簡は、歌のほかに旅行や体調に関する内容が多い。かつてはさらに多くの節の書簡があったようで、後に寺田憲の歌碑に揮かこうしている土屋文明は、戦前の長塚節全集編さん時に節の書簡類を寺田家から借用したものの、戦後の混乱により多くの書簡類を返却できなかったと回顧している。師匠である佐佐木信綱のぶつなの書簡からは、歌の添削内容などがみられる。憲の活動の舞台は信綱主宰の竹柏会だったが、友人の長塚節や伊藤左千夫との関係から両者亡きあとも他流派である『アララギ』などへも惜しみなく協力をしており、編集を担当していた斎藤茂吉や古泉千樫こいずみちかしらの書簡からは、そうした支援の様子を知ることができる。

このように書簡の内容は実に多種多様で、特に短歌や小説の作品論はかなり激しく踏み込んだ議論を交わしている。また各人の家庭や健康のことや金銭の借用依頼なども記されており、作品誕生の舞台裏など、当時の文壇に関する貴重な情報が豊富に含まれている。

「寺田家文学資料」の中の書簡類の差出人（全455点）

No.	差出人	点数	No.	差出人	点数
1	伊藤左千夫	90	13	印東昌綱	2
2	長塚 節	64	14	今井健彦	4
3	与謝野寛	14	15	今井邦子	1
4	佐佐木信綱	111	16	牧野富太郎	1
5	石樽千亦	17	17	西田春耕	6
6	古泉千樫	17	18	猪瀬東寧	4
7	土屋文明	41	19	小泉策太郎	15
8	中村不折	5	20	深井鑑二郎	1
9	木村芳雨	6	21	夏目漱石	1
10	香取秀真	6	22	斎藤茂吉	8
11	木下利玄	2	23	高橋刀畔	38
12	久保木俊彦	1	計		455

※実父飯田新右衛門、義父寺田菊之助宛を含む

2 寺田憲をめぐる人々

明治になると伝統的な和歌とは異なる新しい表現方法による創作活動が活発となる。

この革新運動を牽引したのは正岡子規の根岸短歌会、与謝野鉄幹の東京新詩社、佐佐木信綱の竹柏会などだった。これらの新派は機関誌を発行し全国的な活動を展開するが、寺田憲は自身の属する竹柏会以外の他派へも雑誌刊行経費の支援をするなど、歌壇全体と幅広い交流があった。



10 短歌雑誌『馬酔木』

正岡子規の流れをくむ根岸短歌会の雑誌。子規没後の明治36～41年の間刊行された。編集は伊藤左千夫。発行に際しては寺田憲の出資によるところが大きい。その後『アカネ』、『阿羅々木』・『アララギ』へつながっていく。憲は資金協力するものの明治38年に十首投稿しているだけで、主な活動の舞台は竹柏会の『心の花』であった。



9 わかば集

文人たちの短歌の短冊集。佐佐木信綱等46人の短歌が書かれた短冊54枚が収録されている。寺田憲の歌も3首ある。

寺田家に書簡が残る文人等が活躍した時代

所属分野	差出人	生年	西暦	享年	(江戸時代)				明治				大正		昭和						平成	
		1840			1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000		
竹柏会 心の花	寺田 憲	明治15	1882	56																		
		昭和12	1937																			
根岸短歌会 馬酔木 アララギ	伊藤左千夫	元治 1	1864	50																		
		大正2	1913																			
	長塚 節	明治12	1879	37																		
		大正 4	1915																			
	木村芳雨	明治10	1877	41																		
		大正6	1917																			
	香取秀真	明治 7	1874	81																		
		昭和29	1954																			
	古泉千樞	明治19	1886	42																		
		昭和29	1927																			
	土屋文明	明治23	1890	101																		
		平成 2	1990																			
	島木赤彦	明治9	1876	51																		
		大正15	1926																			
	今井邦子	明治23	1890	59																		
		昭和23	1948																			
	斎藤茂吉	明治15	1882	72																		
		昭和28	1953																			
竹柏会 心の花	佐佐木信綱	明治5	1872	92																		
		昭和38	1963																			
	高橋刀畔	明治3	1870	71																		
		昭和15	1940																			
	石樽千亦	明治2	1869	74																		
		昭和17	1942																			
	木下利玄	明治19	1886	40																		
		大正14	1925																			
印東昌綱	明治10	1877	68																			
	昭和19	1944																				
中村不折	慶応2	1866	78																			
	昭和18	1943																				
明星	与謝野鉄幹	明治6	1873	63																		
		昭和10	1935																			
植物学	牧野富太郎	文久2	1862	96																		
		昭和32	1957																			
小説家	夏目漱石	慶応3	1867	50																		
		大正5	1916																			
政治家	小泉策太郎	明治5	1872	66																		
		昭和12	1937																			
漢学者	深井鑑一郎	慶応 1	1865	79																		
		昭和18	1943																			
政治家	今井健彦	明治16	1883	84																		
		昭和41	1966																			
画家	西田春耕	弘化2	1845	66																		
		明治43	1910																			
画家	猪瀬東寧	天保9	1838	71																		
		明治41	1908																			

(1) 伊藤 左千夫

出身 千葉県武射郡殿台村（現千葉県山武市）

生年・没年 元治元年（一八六四）～大正二年（一九一三）

本名は伊藤幸次郎といい、政治家を志して明治一四年（一八八一）に明治法律学校（明治大学）に入学。しかし眼病が悪化したため退学し帰郷する。明治一八年に再び上京し実業家を目指して牧場で働きながら酪農を学び、やがて明治二二年には東京の本所茅場町に「乳牛改良社」を開設し自立する。同業者の伊藤並根に茶の湯や和歌を学び、やがて万葉集などの勉強に励むようになる。明治三一年の正岡子規の「歌よみに与ふる書」に感銘を受け門人となる。根岸の子規庵に集う門人たちは根岸派と呼ばれ、そこで長塚節と知り合った。二人はしだいに根岸派の中でも中心的な存在となっていた。明治三五年に子規が亡くなったのちは雑誌『馬酔木』を刊行し、その後『アカネ』、『アララギ』と大正時代の根岸派を牽引してゆく。寺

田憲とは長塚節の紹介により知り合ったようで、明治三八年には節とともに神崎の寺田憲を訪ねている。

憲とはその後も親交を深め、雑誌の刊行費用のほか左千夫個人の茶室建立など、広範囲にわたって寺田憲の支援を受けている。



17 神崎神社： 令和6年10月撮影

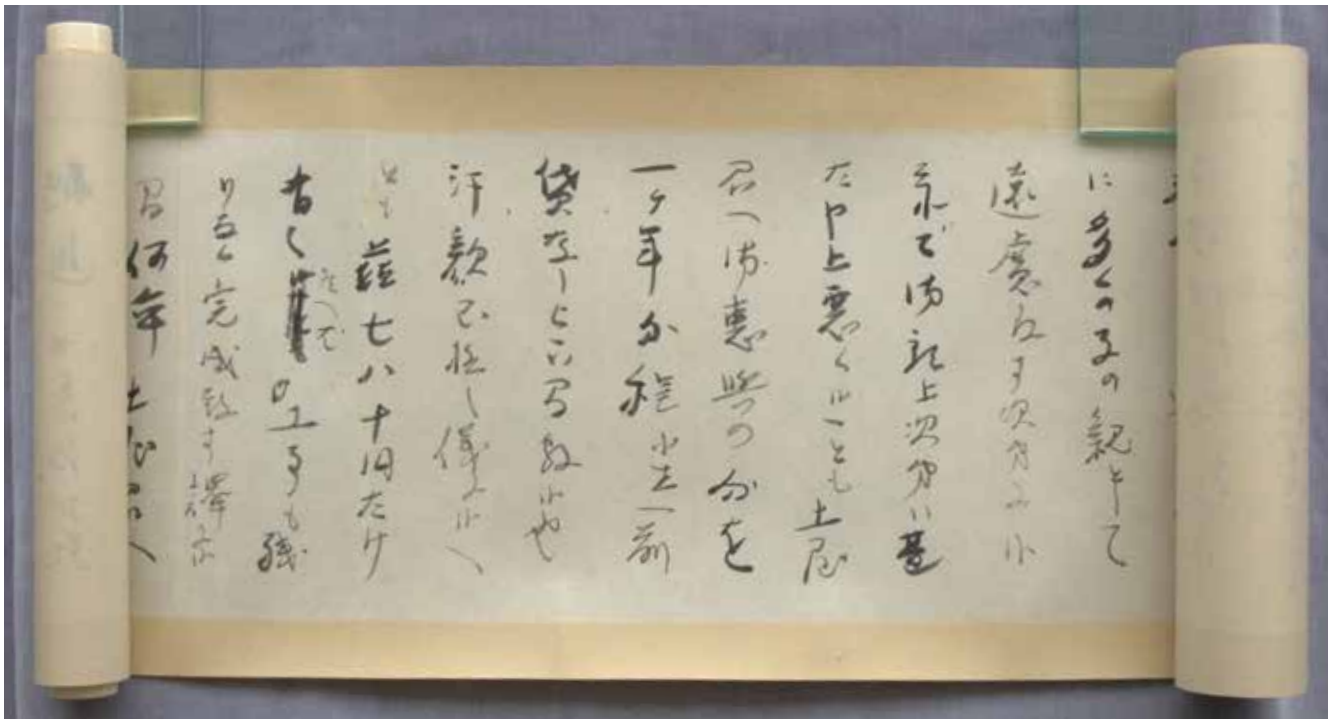


16 左千夫・節・憲（神崎神社）
写真の拡大

16 左千夫・節・憲（神崎神社）写真
提供：山武市歴史民俗資料館
明治 38 年（1905）6月6日～9日

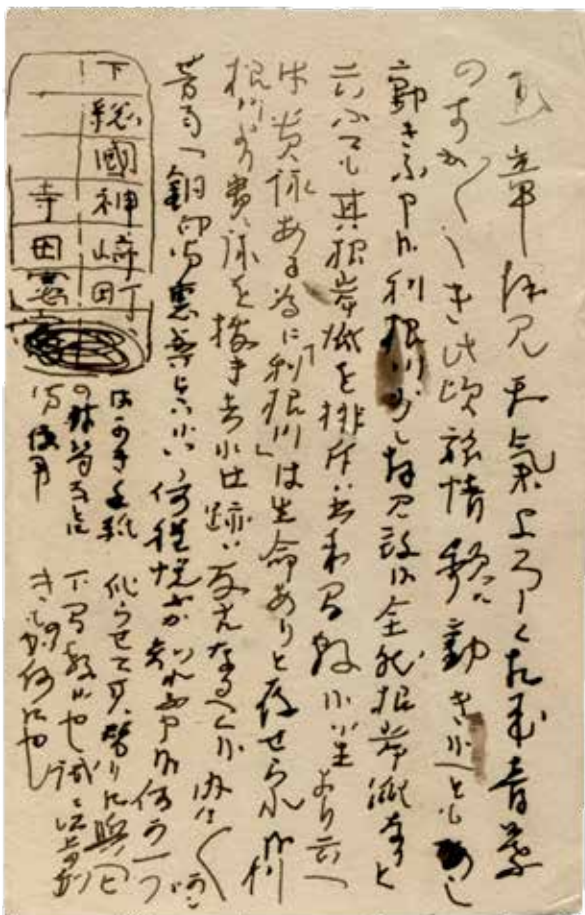
明治 38 年6月6日から9日にかけて長塚節と伊藤左千夫は神崎の寺田憲を訪ねており、その間に写真が趣味だった憲が神崎神社の境内で撮影した。
左から左千夫41歳、憲23歳、節26歳。





14 伊藤左千夫書簡
茶室建設費の借用依頼
明治43年(1910)4月5日

左千夫は本所茅場町の自宅敷地に茶室を建造中だったが、稼業の牛の飼育も疫病などがあって資金難となり、寺田憲へ土屋文明への学費の一部借用を依頼している。憲は一週間後に50円を送っている。材木は蔵真の協力を得ており、5月に完成した茶室「唯真閣」は山武市の左千夫生家に移築保存されている。



15 伊藤左千夫葉書
歌集『利根川』の感想
明治42年(1909)4月28日

竹柏会の歌集『利根川』に載せた憲の歌について感想を記した葉書。「貴詠ある為に利根川は生命ありと存ぜられ候、利根川より貴詠を抜き去れば跡は反古なるべく候」と左千夫は憲の歌のみを絶賛している。

(2) 土屋 文明

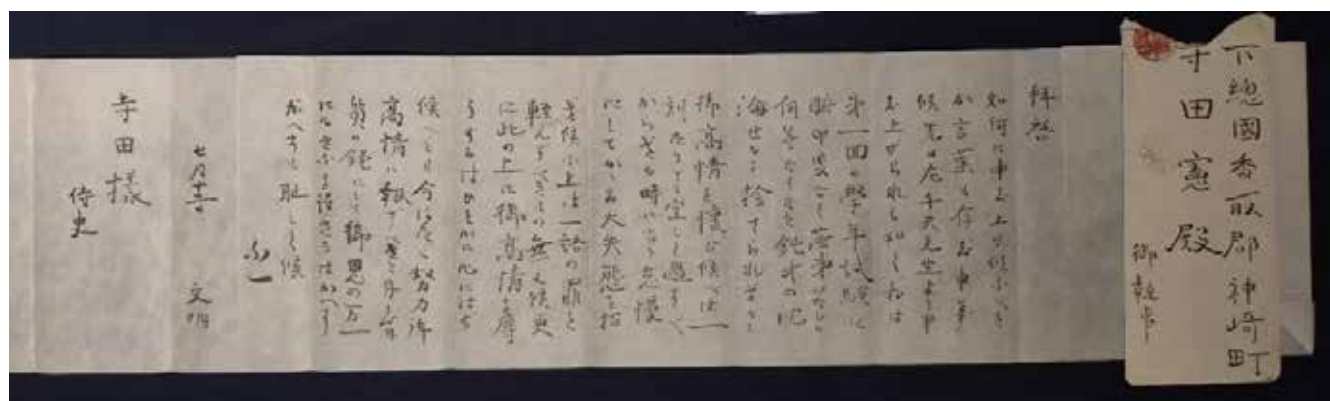
出身 群馬県西群馬郡上郊村大字保渡田（現群馬県高崎市）
 生年・没年 明治二三年（一八九〇）～平成二年（一九九〇）

高崎中学校在学中から文学を学び俳句や短歌を雑誌に投稿していた。

卒業後は上京し、伊藤左千夫のもとに寄宿し牛舎の手伝いをしながら文学の修行を続ける。文明の才能を惜しんだ左千夫は寺田憲に土屋文明の学費を相談し、寺田の出資により文明は東京帝国大学に入学する。卒業後は長野県で教員を務め、昭和五年に上京後は「アララギ」の編集発行を担い、歌壇の指導的存在となっていた。大正一三年には法政大学で教鞭をとるようになり、学生だった寺田憲の長男能之と接している。

昭和五三年に能之の子の欣一氏が神崎神社の境内に寺田憲の歌碑を建立するにあたり、選歌と碑文の揮ごうに協力している。万葉集研究の第一人者として昭和二八年に日本芸術院賞を受賞。同年には宮中の歌会始の召人^{めしうど}となる。昭和六一年に文化勲章を授章。平成二年に肺炎のため百歳で亡くなった。群馬県高崎市には県立土屋文明記念館がある。

* 召人…天皇から招かれて和歌を詠む人



20 土屋文明書簡
 第一高等学校の学年試験の落第を報告
 明治43年（1910）7月12日

第一高等学校の学年試験に落第してしまった。文明はこの件を憲へ報告することを躊躇していたようだが左千夫から言われたのであろう。平身低頭謝りながら今後は努力するので引き続き御高情をお願いをしている。

新酒の
 かをりよろしも
 我醸みしこの
 新酒のかをり
 よろしも
 咲く花の
 香取とふ酒
 くむ人は夏愛
 さとはに忘れ
 てあるべし
 右二首寺田憲
 歌集利根川
 所収
 寺田憲
 飯田家より入りて
 寺田家第22代を
 承く佐佐木信綱
 に學び長塚節
 伊藤左千夫との
 親交は遍く人の
 知る所也今遺
 詠を彫りて留む
 者は第22代
 欣一妻律雨人
 昭和五十三年十月
 受恩後生土屋文明
 謹識



寺田憲の歌碑（土屋文明書）
 昭和53年（1978）10月
 （上：22 土屋文明書、下：23 神崎神社歌碑）

寺田家22代の欣一氏は神崎神社に寺田憲の歌碑を建立するにあたり、関係の深かった土屋文明に選歌と経歴の揮ごうを依頼している。上段が歌集『利根川』から選んだ二首。文末に「受恩後生土屋文明」と記している。

(3) 長塚 節 ながつか たかし

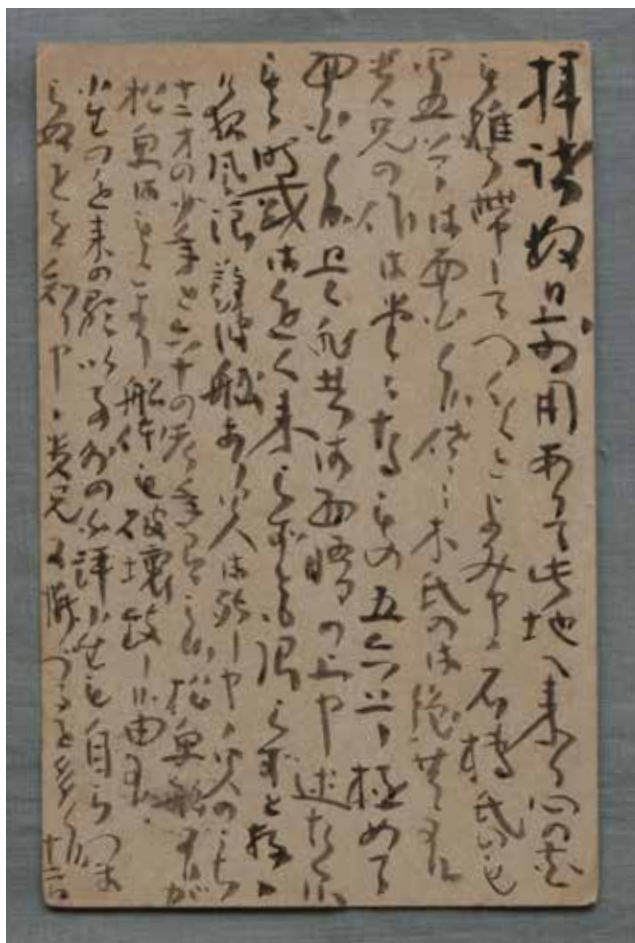
出身 茨城県岡田郡国生村（現茨城県常総市）

生年・没年 明治一二年（一八七九）～大正四年（一九一五）

長塚節は幼い頃から神童と呼ばれ、三歳の頃「百人一首」を暗唱したといわれている。作歌は十六歳頃から始めており、当初は旧派的なものだったが、明治三十三年に東京根岸の正岡子規を訪問し入門した。その後、歌会に参加し伊藤左千夫、香取秀真、岡麓らと親交をもつようになった。根岸短歌会の機関誌『馬酔木』の編集に携わり、短歌も『馬酔木』に発表した。

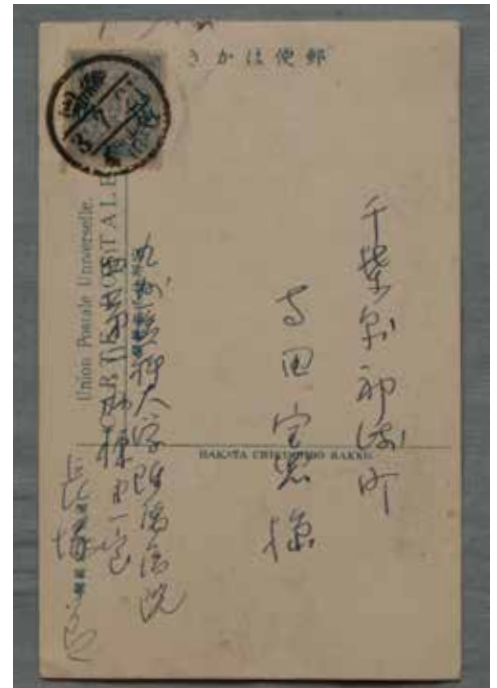
小説『土』は明治四五年、夏目漱石の称讃の序を受け刊行された。明治三八年六月、伊藤左千夫とともに神崎の寺田憲を訪ね、その時、神崎神社境内で撮った「左千夫と節」「左千夫と節と憲」の写真が残されている。この写真は寺田憲により撮影されたものと思われる。

三十三歳の時に喉頭結核にかかり、東京で入院していたが夏目漱石から久保猪之吉博士への紹介状を得て福岡の九州帝国大学付属病院まで診察を受けに行っている。体調が良いときは各地を遊山して作品を発表していった。その後、数回にわたり療養のため福岡を訪れたが、大正四年福岡の大学病院に入院中三十六歳で亡くなった。



24 長塚 節葉書
雑誌『心の花』受贈のお礼
明治 39 年（1906）10 月 4 日

『心の花』を送ってもらった礼状。この雑誌は佐佐木信綱が主宰する竹柏会の機関誌で、節は憲の作品を佐佐木信綱や石樽千亦と同等以上の作だと称賛している。



25 長塚 節葉書
九州医科大学で治療報告
大正3年(1914)7月21日

夏目漱石に紹介を受け、九州医科大学病院の久保博士の治療を受けた。その後体調も良くなり8月には九州各地を旅行している。寺田憲へも健康のための海水浴を勧めている。



26 長塚 節書簡
九州で療養中の近況を報告
大正3年(1914)11月18日

九州の旅から戻り、再び治療を受けている様子を記している。この後、容体が悪化し、1か月半後の2月8日に亡くなった。寺田家に残る節からの最後の葉書である。

(4) 香取 秀真

出身 千葉県印旛郡船穂村（現千葉県印西市）

生年・没年 明治七年（一八七四）～昭和二年（一九五四）

本名は香取秀治郎。鑄金工芸家であり歌人としても多くの作品を残している。明治一四年（一八八一）に旧佐倉城下の鑄木村（佐倉市鑄木）の麻賀多神社の宮司家の養子になる。佐倉集成学校（現県立佐倉高校）で万葉集などを筆写し和歌を学ぶ。明治二五年に東京美術学校に入学し、美術を岡倉天心、絵画は狩野友信、木彫を高村光雲らに学び、鑄金科を卒業した。

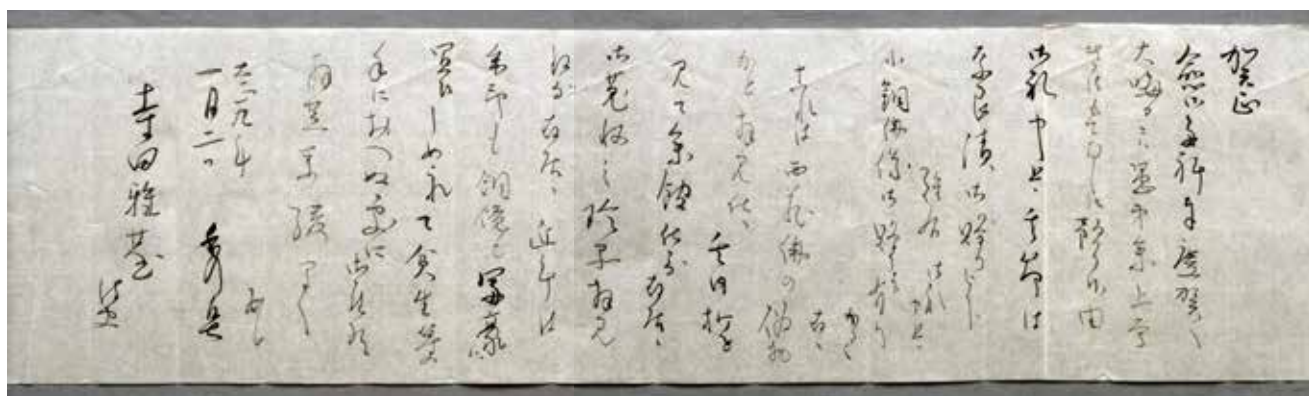
金工史家として『日本金工史』『金工史談』などの学術書を多数著している。歌人としては十代より俳句、漢詩、和歌などを好み、二十三歳で岡麓らと雑誌『うた』を発行、明治三二年二十六歳から竹柏会の『心の花』の編集委員となった。同年に正岡子規と親交を深め、明治三二年三月一四日に短歌会を催し、これが秀真や岡麓ら正岡子規の門下による根岸短歌会となっていた。その後、伊藤左千夫、蕨真、赤木格堂、長塚節、西田巴子、森田義郎、木村芳雨らも参加することになる。明治三六年根岸短歌会の機関誌『馬酔木』の刊行には編集同人として参加している。正岡子規の埋柩の際には「子規正岡常規之墓、慶応三年九月十七日生、明治三十五年九月十九日歿、享年三十六」と真鍮板に刻している。昭和二八年文化勲章を授与され、昭和二九年の宮中歌会始の召人*として参内した後、同年二月三一日死去する。

*召人…天皇から招かれて和歌を詠む人



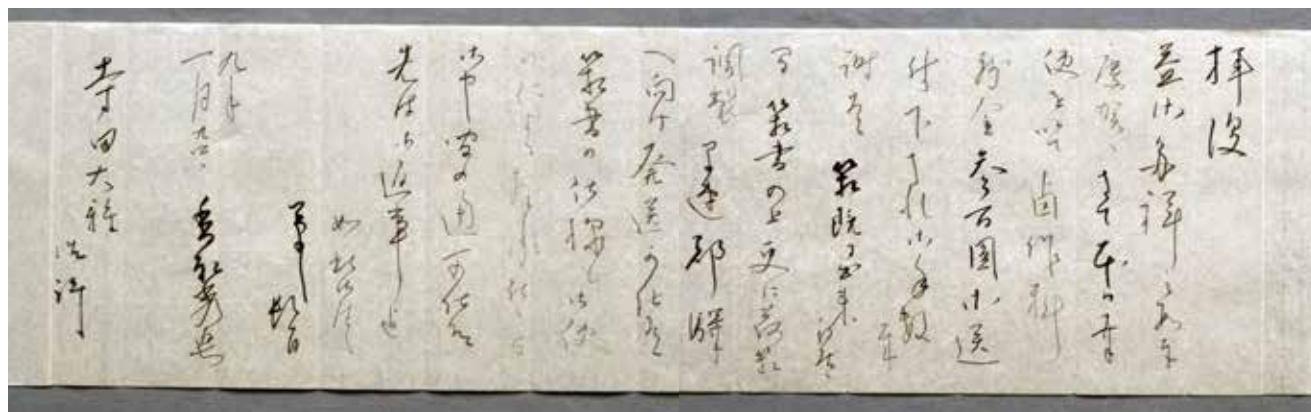
30 鴟鵂 白
香取秀真作 寺田家所蔵

憲の求めにより大正8年（1918）に秀真が制作した鑄金作品。鴟鵂はフクロウ、白は酒器のこと。外箱を含め800円を支払っている。



28 香取秀真書簡
小銅仏像のお礼
大正9年（1920）1月2日

憲は仏像などを蒐集しており、秀真はその中の小銅仏像を贈られている。今回のものは偽物であったが、いずれ珍品を拝見したいと伝えている。また最近銅鏡が富豪に買い占められていることを嘆いている。



29 香取秀真書簡
鴟鵂^{しきょうめう}の作料残金受けとり
大正9年（1920）1月24日

鴟鵂^{しきょうめう}の作料として内金 500 円を受けていたが、その残金 300 円を受領した御礼。外箱も箱書きをして早々に送ると記している。

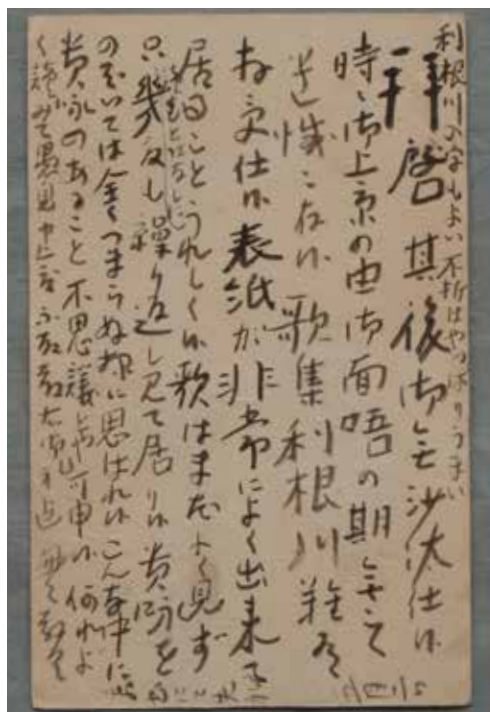
(5) 古泉 千櫨 こいずみ ちかし

出身 千葉県長狭郡吉尾村細野（現千葉県鴨川市）

生年・没年 明治一九年（一八八六）～昭和二年（一九二七）

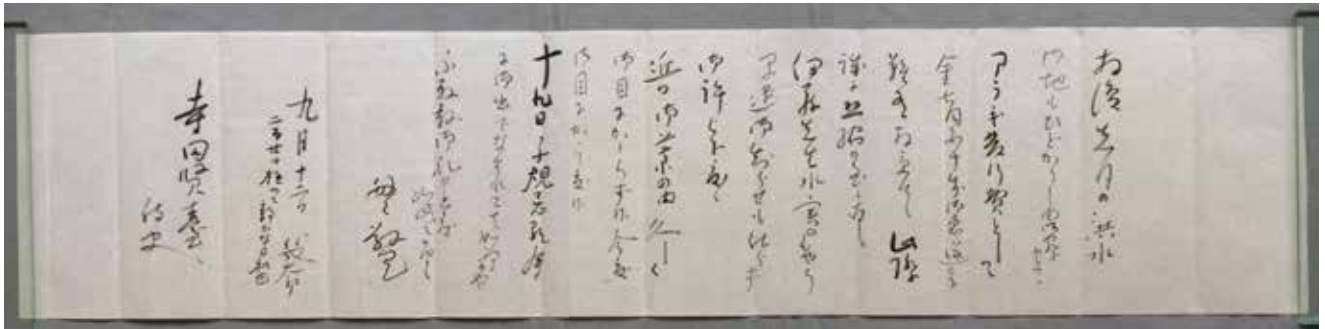
本名は幾太郎。蓑岡老人とも号した。家は農業で酪農をしており、少年時代に父から漢学を学んだ。十四歳の頃から新聞「万朝報」に歌を投稿し掲載されるようになる。安房郡内で小学校の代用教員を務めながら、東京の歌壇へ投稿を続けた。当初は佐佐木信綱の主宰する『心の花』への投稿が多かったが、明治三七年には『馬酔木』へも投稿し伊藤左千夫から大いに評価された。その後、明治四一年には伊藤左千夫の門人となり、根岸派の『アララギ』の編集を斎藤茂吉らと共に担うようになる。

寺田憲とは伊藤左千夫を通しての交流があり、編集者とスポンサーという関係であるが、旅行好きな千櫨は旅先から寺田憲へこまめに葉書を出している。大正一〇年頃から創作活動は消極的となり、大正一二年のアララギへの投稿が最後となる。昭和二年八月に心臓衰弱のため四十二歳で亡くなった。根岸派を引継ぎながらアララギ派の歌風を発展させた人物として評価される。



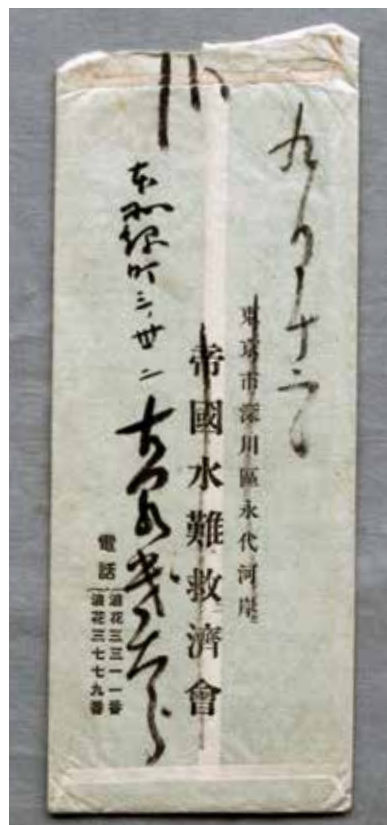
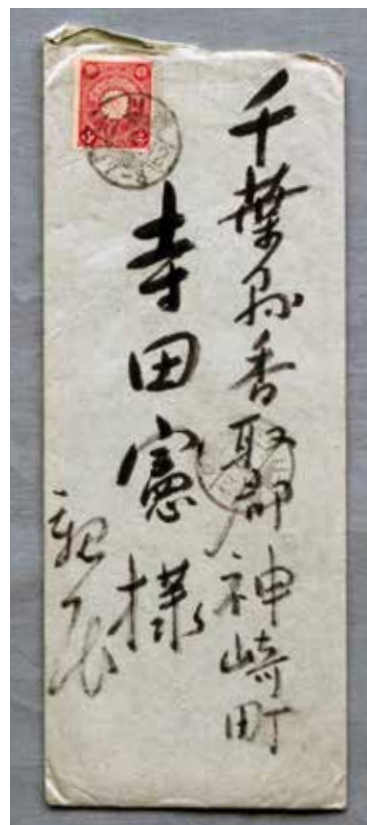
32 古泉千櫨葉書
歌集『利根川』のお礼
明治42年（1909）5月2日

竹柏会で刊行した『利根川』は寺田憲や高橋刀畔ら刀根川会同人による歌集。千櫨はその中の寺田憲の歌を褒めるものの、他の歌はつまらないと酷評している。また画家の中村不折が描いた表紙を称賛している。



31 古泉千樫書簡
『アララギ』の発行費拝受のお礼
明治43年(1910)9月12日

根岸派の機関誌『アララギ』は伊藤左千夫が主となり、斎藤茂吉や古泉千樫らが補佐して編集していた。その印刷費として寺田憲から7円50銭を受領したお礼。



31 古泉千樫書簡・封筒

(6) 齋藤 茂吉 さいとう もきち

出身 山形県南村山郡金瓶村かなかめ（現 山形県上市市）

生年～没年 明治一五年（一八八二）～昭和二八年（一九五三）

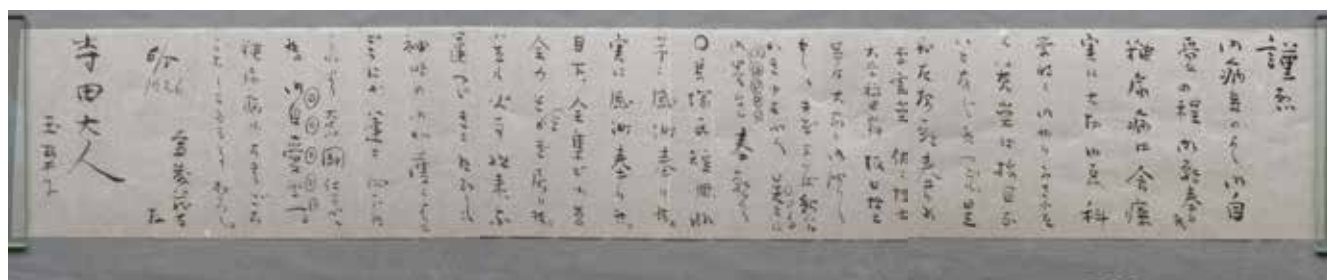
十四歳の時に上京し、親戚の医師齋藤紀一の元に下宿。東京帝国大学医科大学を卒業し、後に婿養子となり齋藤姓を名乗る。医者として海外留学を経て青山脳病院長となり精神科医として、また歌人として生涯をすごした。

十代の時に正岡子規の『竹の里歌』を読んで作歌を志し、明治三九年に伊藤左千夫の門に入り『アララギ』の創刊に参加した。大正二年に歌集『赤光』しやうくわうを刊行。昭和以後も青山脳病院長を勤めながら、同派を率いて精力的な活動続けた。主な歌集に『あらたま』『白き山』などがある。

昭和九～一五年の『柿本人麿』に代表される多くの研究書をはじめ、『短歌写生の説』おほのほかの歌論書がある。昭和一二年に芸術院会員となり、昭和二六年には文化勲章を授与された。次男は精神科医で小説家の北杜夫。きたもり



33 齋藤茂吉書簡・封筒



33 齋藤茂吉書簡
病氣お見舞いと長塚節の短冊借用のお礼
大正15年（1926）5月6日

糖尿病を患った憲に対して、茂吉は医者らしく食療が重要だと助言をしている。当時茂吉は『長塚節全集 全8巻』（大正15年春陽堂）の編さんに関わっており、憲から節の書簡や短冊を借用している。

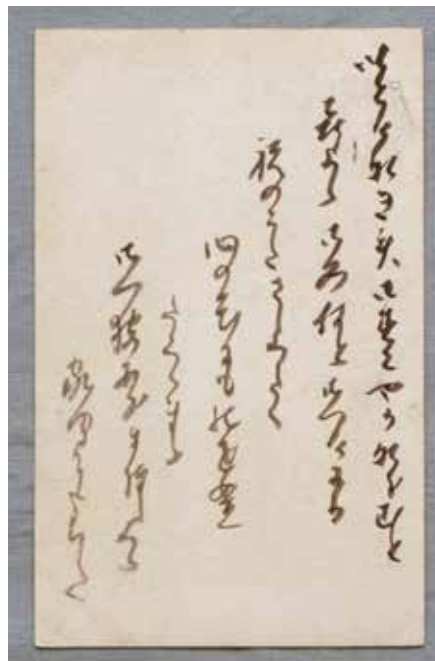
(7) 佐佐木 信綱 ささき のぶつな

出身 三重県鈴鹿郡石薬師村（現 三重県鈴鹿市）

生年・没年 明治五年（一八七二）～昭和三八年（一九六三）

佐佐木信綱の父弘綱は本居宣長の学統を継ぐ歌人・国学者で、幼い頃から父の教育を受けて育った。四歳で『万葉集』『山家集』を暗誦し五歳で短歌を作ったという。万葉集の研究者として後に東京大学で歌学史を教えている。歌人としても多くの歌集を発表し、また唱歌「夏は来ぬ」の作詞者として知られている。短歌結社「竹柏会」ちくはくかいを組織し、機関誌『心の花』を明治三十一年に創刊している。竹柏会は現在も全国に支部をおき月刊『心の花』を刊行している。

信綱は昭和一二年には第一回文化勲章を受章する。戦争が激しくなる昭和一九年には静岡県熱海市へ移り、その自宅を凌寒荘と名付け創作活動に励んだ。特に全国各地の学校から請われて校歌の作詞にも携わっており、千葉県内でも多くの校歌を作詞している。昭和三八年急性肺炎のため九十一歳で亡くなった。

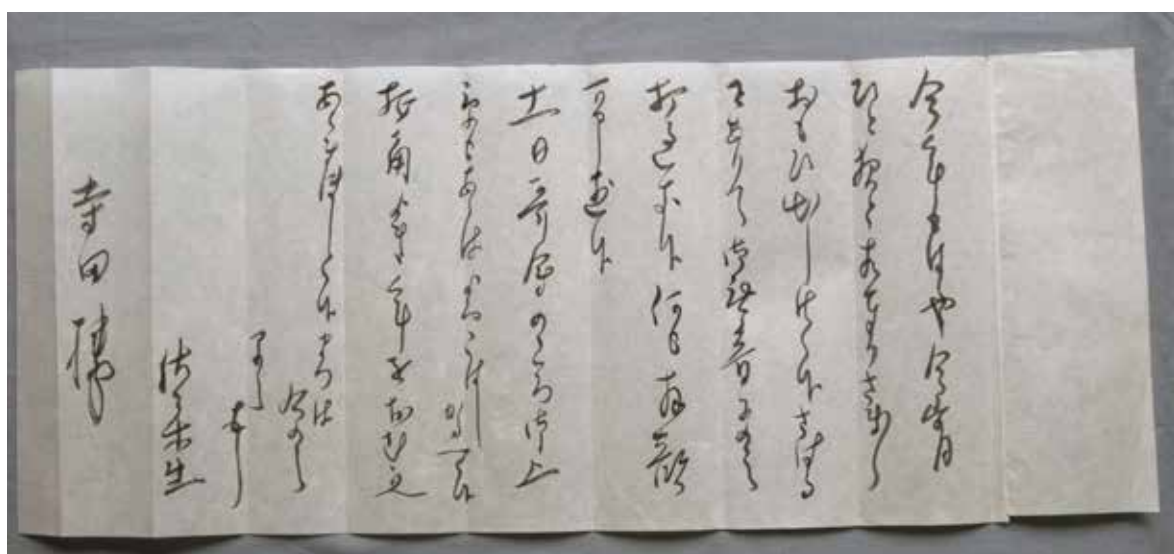
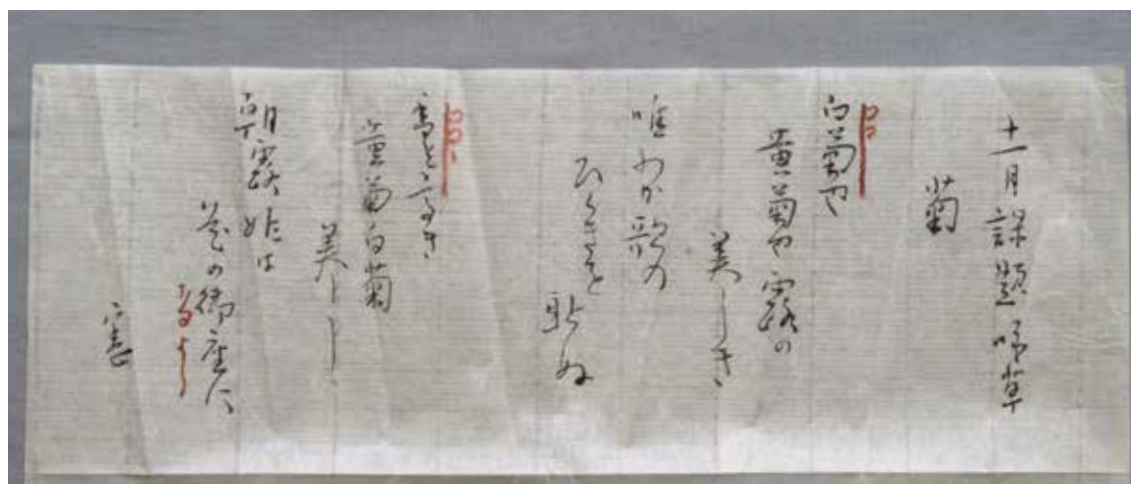


34 佐佐木信綱葉書
寺田憲の子供誕生のお祝い
明治39年（1906）11月12日

誕生した子供のお祝いの歌を贈りたいので、何と名付けたのか知らせてほしいと記している。



35 佐佐木信綱書簡・封筒



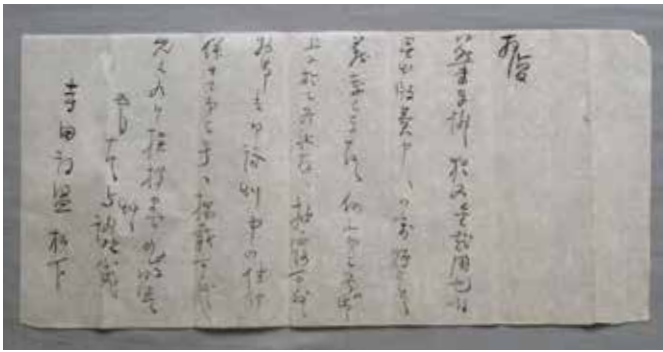
35 佐佐木信綱書簡
憲の歌への添削
明治40年(1907)12月31日

竹柏会の『心の花』の11月の課題は菊だったので、憲が投稿した歌二首に対して、信綱が朱書きで添削している。

(8) 与謝野 鉄幹

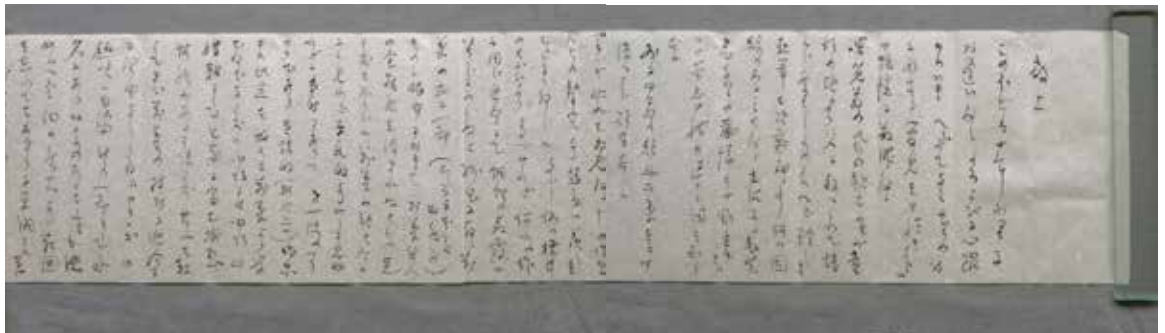
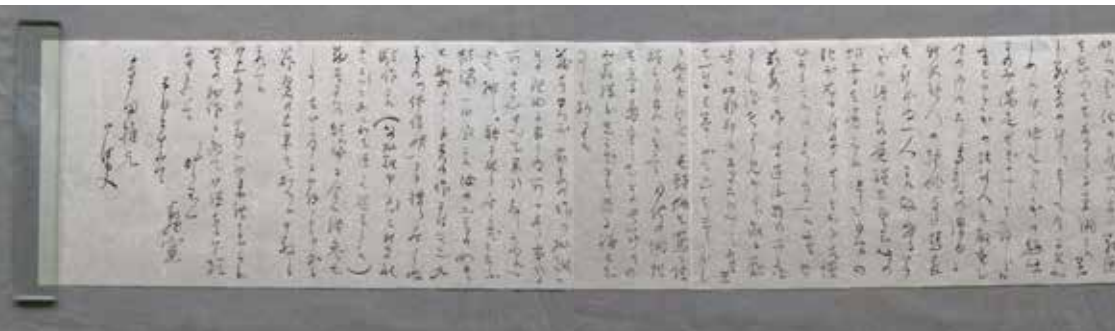
出身 京都府愛宕郡岡崎村（現 京都府京都市）
 生年・没年 明治六年（一八七三）～昭和一〇年（一九三五）

本名は寛^{ひろし}で明治二五年十九歳の時に上京し、落合直文の門に入り短歌結社「浅香社^{あさかしや}」の創設にかかわった。明治二七年二十一歳で『亡国の音』を発表し、旧派の歌を批判して短歌革新運動の先頭に立った。その後、明治三二年二十六歳の時に「東京新詩社」を設立し、翌年に機関誌『明星^{みょうせい}』を創刊した。鉄幹の作風である浪漫主義^{ろまんしぎ}は、正岡子規の写実主義とは相容れないものとして、子規の門下生らは「子規鉄幹不可並称説」の論争を歌壇に巻き起こすが、鉄幹と子規はそれぞれの考え方で短歌革新の運動を進めていった。明治四一年に『明星』は休刊するが、これから北原白秋^{はくしゅう}・石川啄木^{たくはく}・窪田空穂^{うつぼ}らが育っている。



37 与謝野鉄幹書簡
 『明星』への出版資謝礼
 5月14日

与謝野鉄幹が主宰する新詩社の機関誌『明星』の出版費として寺田憲は2円を寄付している。



36 与謝野鉄幹書簡
 雑誌『アララギ』の感想と短歌の将来に関する私見
 明治42年（1909）5月26日

『アララギ』に掲載された歌が万葉集に迎合している点を指摘し諸人の覚醒を望むとしている。そうした根岸派との考え方の違いを述べるが、互いの個性を尊重し、長所を發揮しながら足りない点は互いに補うべきだと、短歌界の将来について私見を記している。

(9) 高橋 刀畔 たかはし どうはん

出身 千葉県香取郡佐原町下宿しもじゆく（現 千葉県香取市）

生年・没年 明治三年（一八七〇）～昭和一五年（一九四〇）

佐原町下宿しもじゆくの円城寺家の長男として生まれた。本名は竹次郎。刀畔は利根川畔の意味。二十二歳の時に香取郡滑河町（成田市）の高橋家へ養子に入る。地主の家で農業を営みながら、明治三四年三十二歳で佐佐木信綱が主宰する「竹柏会」に入会し信綱に師事した。明治三九年三十七歳の頃に香取文学界を興して文学指導を行い、また文芸の道を志した刀



38 高橋刀畔葉書
銚子で避暑中の憲へ送った歌
明治38年（1905）8月11日

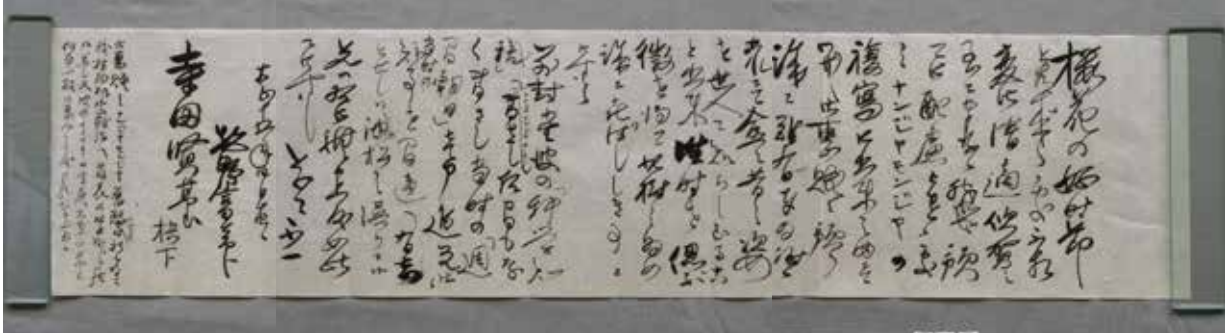
憲は明治38年7月に避暑に訪れていた銚子から、海岸の風景を描いた絵葉書を高橋刀畔へ送っており、その返信として滞在先の銚子快哉楼へ刀畔が送った葉書。歌三首が添えられている。犬吠埼灯台や君ヶ浜の松林を描いた憲の絵は『寺田憲遺歌集』の表紙に使われている。



39 高橋刀畔葉書
竹柏会の大会で寺田憲と会えず、
残念だったことについて
明治39年（1906）4月8日

寺田憲が竹柏会の大会を欠席されて仲間も残念がっていたが、御令嬢が病気だということなので保養専一にするよう気遣っている。葉書は大会の記念葉書である。

根川会同人（寺田憲・桜井常吉・高柳義方・多田慶次郎・高橋刀畔他）で明治四二年に歌集『利根川』を「竹柏会」から刊行した。
また自身の歌集『果樹園』も大正七年四十八歳の時に「竹柏会」から刊行している。大正一一年五十三歳から日本青年団の講師を嘱託され、農業の改善、農村青年の指導等で全国を講演してまわるなど農村指導にも積極的で、昭和一五年四月に七十一歳で滑河町長となるが同年一二月に死去する。



40 牧野富太郎書簡
ナンジャモンジャの木の写真お礼
大正 15 年 (1926) 4 月 14 日

寺田憲は植物学者の牧野富太郎へ神崎神社境内の「ナンジャモンジャ」と呼ばれる大木の写真を送っており、それに対する牧野からの礼状。



41 ナンジャモンジャの木
神崎神社 (香取郡神崎町)
平成 17 年 3 月撮影

ナンジャモンジャの木というのは珍しい樹木の呼称として各地にある。木の種類はまちまちで、神崎神社の木はクスの巨木で、水戸光圈が名付けたという伝説がある。国の天然記念物。主幹は明治 40 年 (1907) に焼失したため、地上から約 7m のところで切断されているが、その根本からでた 5 本の幹が親木をとり巻き樹高約 25m になっている。



42 『寺田憲遺歌集』
昭和 54 年 3 月

寺田欣一氏が憲の没42周年に刊行した。土屋文明が校閲し序文を寄せている。表紙の絵は明治38年（1905）7月に憲が避暑先の銚子の快哉楼から高橋刀畔へ宛てた自筆絵葉書。題字は憲の孫にあたる律氏の書。

おわりに — 寺田家文学資料の意義 —

かつての利根川下流域は千葉県でも経済・文化が最も発達していた地域でした。大店が並ぶ河岸には各地からの物資が集まり、大勢の人々が行き交うなか、高い文化的環境が育まれていました。

明治になり学校制度が普及すると東京の大学へ学問の拠点が移り、ここでは様々な分野で革新的な新しい文化が誕生していきます。伝統的な和歌から自由な短歌へという動きもそうした運動の一つで、寺田家に残る中央で活躍する文人たちからの書簡は、まさに日本の歌壇が大きく転換していく時期に書かれたものであり、当時の近代文学史の舞台裏を物語る貴重な資料群といえます。

今回のトピックス展をとおして、近代房総の文化史上における寺田家文学資料の意義を広く皆様に伝えることができれば幸いです。

令和6年度 千葉県立中央博物館
トピックス展

近代文学を支えた
寺田憲
とその周辺

寺田憲肖像（寺田家所蔵）
あしび『馬酔木』

——佐佐木信綱に學び 長塚節 伊藤左千夫との親交は
遍く人の知る所也
(神崎神社 寺田憲歌碑 土屋文明書より)

令和6年
10月19日(土)～11月17日(日)
[開館時間] 9:00～16:30 (最終入場 16:00)
[休館日] 10/21、10/28、11/5、11/11
[入場料] 一般300円、高校生・大学生150円
[中学生以下・65歳以上・障害手帳をお持ちの方及び介護者1名] 無料
[団体料金(20名以上)] 一般240円、高校生・大学生120円
千葉県立中央博物館
NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (青葉の森公園内)
Tel. 043-265-3111 (代表) https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/

展示会チラシ



展示会場入り口



展示風景

展示資料翻刻

【凡例】

- ・会期中に展示資料の翻刻文を印刷して配布した。
- ・掲載順は展示室の資料の配置順に沿っている。
- ・文書の内容を示す見出しを付けた。
- ・旧字は常用漢字にした。
- ・変体かなは原則としてひらがなにした。
- ・改行は原文書どおりに表記した。
- ・封書の表裏と葉書の表面は省略した。
- ・翻刻にあたっては、千葉県立上総博物館発行の『下総神崎町寺田家文学資料(一)・(二)・(三)』(昭和51、52年)を参考とした。

9 わか葉集

桜井兄二おくる
空蟬の世は常なしと君知るも
この秋風をいかにきくらむ
弟 憲

いはらきを吾立ちくれば新治の
たかはまのうみ波たてるかも
節

寺田ぬしの初子暢子の君のせち会に
うへしきて姫君の国とはたゝへけれ
えまひめてたきひめもの花
刀畔閣

うまやちの川そひ柳ひと葉こほれ
ふた葉こほれて日はくれにけり
鉄幹

かたはらに秋くさの花かたるらく
ほろびしものはなつかしきかな
牧水

伊藤左千夫

14 茶室建設費の借用依頼

拝啓 漸く花・
に入らんとするに兎角
不順之氣候に御
座候、御健康御
変りもなく候や、猶近く
に御上京之御都合
も無く候や、偕又平
生之御厚誼に甘へ
折入って御願申上度
事有之候、実ハ幾
度か考てハ幾度躊
躇致候へとも、小生一生
懸命之場合故、厚
顔に願出候次第に候
それハ御承知之茶室

築造工事中之處、牛
疫之流行などにて
営業上都合あしき
事多く（小生宅ハ無論
其心配ハなく候へとも）幾分
の損失ハ免れ難く候、如
此際に茶室を作るても
あるまいといふ様な内抗
もあると申様の儀にて
多年の宿願一生の
希望たる茶室工事も
中止の止むなきに
陥りかけ申候、僅かに
六坪半の小屋
膝に入る、の一室に候へと

も小生に取りては一生懸命の希望に候処
茲二中止の悲運に陥り候
事御憐察願上候
それも金額より申せば
たいした事にハ無之、只
茶室といふ無用物たけ
に多くの子の親として
遠慮致す次第に候
それで御願上次第ハ甚
た申上悪く候へとも土屋
君へ御恵与の分を
一ケ年分程小生へ前
貸なし被下間敷候や
汗顔至極之儀に候
へとも茲七八十円たけ
有之候へば工事も残
りなく完成致す訳に候
間何卒土屋君へ
の学資を小生に
融通させ被下度、切願
致候、さすれハ小生八月賦に
て返却する恩恵
に浴したる次第に候、こん
な事を御願申事返
返すも赤面の至二候へと
も何もかも老生一生の
願と御ゆるし被下度候
次手ニ申上候、昨年恩借
之分御恵に甘して半額
を土屋君の方へ
廻し、仰せ之如く十二月分
より七円ツ、渡来り、此
三月にて四回相渡し候故
今三回渡せは四十九円
に相成候故、本年七月
より今回 御聞済の上は拝借之分にて
相渡す都合に候、此事ハ

明白に土屋君に申聞け
置き可申候、定めて
御うるさく思召さんな
れとも今後再びかや
うなる鄙しき御願は
致間敷候間、御憐笑
之上御聞済被下度
願上候、万は拝顔之
折可申上候 恐惶謹言
四月五日 夜 左生
寺田様
侍曹

15 歌集『利根川』の感想

玉章拝見天気よろしく相成青葉のすが／＼しき此頃旅情頗ル動き候へともあし動き不申候利根川少し拝見致候全然根岸派なりと云ふても其根岸派を排斥ハ出来間敷候小生より云へは貴詠ある為に「利根川」は生命ありと存せられ候利根川より貴詠を抜き去れば跡ハ反古なるへく候内々／＼阿々芳雨へ銅印御恵与被下候ハ、何程悦ふか知れ不申候何か一つ作らせて其替りに与へ被下間敷候や誠ニ以上の如きもの如何にや候

下	総	国	神	崎	町
		寺	田	憲	

はかき手紙の封筒などに御使用

13 近況報告と歌集『利根川』の提供依頼

玉章拝見仕候過日ハ御光来被下候由又候不在致し拝眉を得ず遺憾無此上候月始めにハ佐々木君より御上京之趣承り候まゝ翌日齊藤古泉君等と散歩かてら黒船町へ御たつね致候処御帰りの跡にて残念を語り合申候是からは御出被下候節ハ御めんどうにても御一報を賜はり度願上候利根川いよ／＼出来之御運ひの候一部御恵与ニあつかり度願上候ホト、キスヘ又小説を書き候これハ真面目な人間の幸福といふ意味を描き候ものに候故家庭に於て読むによろしきものと存候間一部進呈可

仕候 御近詠拝見致候これハ乍失礼感興なくして作れるものと存候故全首内面の動きがなく候、酒飲まぬ人が酒に興する如くわざとらしき点相見え申候委しくは御目にかゝり可申候わくらはに君を迎て汲む酒の興つきなくに我れ酔にけりこれはよろしく候へとも猶欲を申さは余り淡泊にして物足らず候来月御上京之折ハ是非御目にかゝり度楽み待上候

三月二十六日 左生 寺田憲様 侍曹

夏目漱石

18 伊藤左千夫『野菊の墓』の感想

拝啓 只今ホトゝギスを読みました。野菊の花ハ名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しくて、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。三六頁の民さんの御墓に参りに来ました

と云ふ一句は甚だ佳と存じます。只次にある「只一言である云々」の説明ハない方がよいと思ひます小生帝文に興味の遺伝と云ふ小説をかきました君の程然も野趣もないが亡人の墓に白菊を手向けるといふ点に於て少々似て居りますから序によんで下さい。押しつまつて御多忙の事と存じます。新年ハ欠礼致します 以上 十二月二十九日 金 伊藤大兄

土屋文明

19 金子拝受のお礼

拝啓 今日先生の所へ参り申し候御送り下され候金子正にいただき申し候先生は来月ならでは御帰りなき由に候アラゝキは古泉様より送られしことゝ存じ候先は御礼まで 草々不尽 十月三十一日 文明 寺田様 玉机下

20 第一高等学校の学年試験の落第を報告

拝啓 如何に申し上げ候ふべきか言葉も存じ申さず候先日左千夫先生より申し上げられし如く私は第一回の学年試験に腑甲斐なく落第いたし候何等なすなき鈍才の沈淪せるを捨てられざりし御高情を懐ひ候へば一刻たりとも空しく過すべからざる時に当り怠慢にしてかゝる大失態を招

ぎ候ふ上は一語の罪を
軽んずべきもの無之候更
に此の上に御高情を辱
うするはひそかに心にはぢ
候へども今はたゞ努力御
高情に報すべきと存じ候
質の鈍にして御恩の万一
にもさふを得ざるはかへす
がへすも耻しく候

不二

七月十二日 文明

寺田様

侍史

21 長野県の校長職を辞して

東京に戻ったことの報告

拝啓 只今御令息
より御届け被下候御
手紙拝見仕り候
御無沙汰致し居り候
ところへ御手厚き御
文にて何とも汗顔の
至りに不堪候歌集の
出来候ときも持参する
つもりを果さず後より
すぐ参上せんと存じ
手紙もつけず差上お
き候に遂今日までの
御無沙汰申訳なく候
昨年四月急に信州の
職を捨てて上京家族
を郷里の方に住ませ私
一人下宿住いたし居り
とかく一身のことにかまけ

て諸方に皆失礼の
み重ね居り候是非一度
参上いろいろ申上度存
じ居り候

御令息の法政に御在
学のこと今まで存じ申
上げず失礼いたし居り候
やはり絶えぬ御縁を
いたたくやうにて誠に
よろこばしく存ぜられ候
学林方面のことにて御用
も有之候はば何なり
仰せつけ被下度願
上候

本月末頃一家を東京に
まとむるつもりに致し居
り候へば或は参上する
はその後にしていたゞき
たきかと存じ居り候
それ迄は只今の下宿に
在宿のつもりにも有之候
万々拝眉の節を
待ち上申候 頓首
東京小石川区上富坂
二十三いろは館方
寺田憲 様

侍史

土屋文明

22 寺田憲の歌碑（神崎神社碑文）

新酒の
かをりよろしも
我醸みしこの
新酒のかをり
よろしも
咲く花の
香取とふ酒
くむ人は憂
をとほに忘れ
てあるべし
右二首寺田憲
歌集利根川
所収
寺田憲
飯田家より入りて
寺田家第二十代を
承く佐佐木信綱
に学び長塚節
伊藤左千夫との
親交は遍く人の
知る所也今遺
詠を彫りて留むる
者は第二十二代
欣一妻律兩人
昭和五十三年十月
受恩後生土屋文明
謹識



長塚節



24 雑誌『心の花』受贈のお礼

拝啓長途乃旅も四十日目に
て漸く朔日に帰宅仕り候御書
状も拝見仕り候心の花誌上の
玉詠おどろき申候佐々木石樽
両氏の作の如き全く顔色なし
小生は明日家事の都合にて勿来
近くまで参り可申候に付詳細の
批評は申上難く候
早々 四日

25 九州医科大学で治療報告

（表）

千葉県神崎町

寺田憲 様

九州医科大学附属病院
西第二病棟第一室

長塚 節

（裏）

あなたは其後如何
ですか海水浴へ入
らつしやることをおす
め致します

私の都合のいい時ばかりで近頃は全く御無沙汰申わけもありません何しろ暑いのですから困つてますが咽喉は焼いた処は大変いゝと申して居りますも一度焼くのが大分六かしい処だ相で気管のすぐ側だといつてます

七月二十一日 朝

26 九州で療養中の近況を報告

(表)

千葉県神崎

寺田憲 様

福岡市外東公園 大学通平野旅館

長塚 節

御願致し候品早速御とゞけ被下難有奉存候一つは即日開きて賞味仕り候小生も此頃はふと熱もさがり大に楽に相成申候金曜日(二十日)に手術を受け申候上は間もなく帰国致度と存居り候昨春秋以来熱高くて随分苦しみ申候其ため昨夏の頃まで殆んど何ともなかりし肺部に意外の故障を生し居候

は遺憾に存じ候大に要心致す覚悟に有之候十一月十八日

(裏)

此間の日曜日に二ヶ月ぶりに外出致候に見るもの皆珍らしく殊に此地方には恐ろしきばかり赤き渋柿を見申候毎日ねてばかり居り申候故山茶花のさきたるをも知らずに打過し申候いつの間にかぎぼんなども黄に染み申候既に冬の季節ながら此地にて晩秋の氣漂ひ申候

香取秀真

27 銘酒「香取」の代金支払

拝啓

過日は「香取」御送り被下

御手数奉謝候其節

代金差上不申延引

之段御海容被下度候

為替を以て金拾円五拾

銭御送申上候間前

借の分御引去り被下度候

残余は又々一斗

御送り被下度願上候此分

御いそぎ御送り被下様御

取計らひ被下度候右

願用迄 早々 頓首

大正五年十一月廿九日 香取秀真

寺田仁台 侍曹

28 小銅仏像のお礼

賀正

愈御多祥奉慶賀候

大晦日二ハ愚弟参上厚

き御もてなしに預り候由

御礼申上候其節は

奈良漬御贈り被下

難有御礼申上候

小銅仏像御贈り被下

有りかたく

存候

これは西藏仏之偽物

かと拝見仕候其内折を

見て参館仕度存居候

御蒐収之珍品拝見



致度存居候近年は

旧印も銅鏡も富豪に

買ひしめられて貧生等の

手におへぬ処に御座候

拝芝萬縷 早々頓首

大正九年

一月二日

秀真

寺田雅台 侍史

29 鴟鴞^{しきょうゆう}の作料殘金受けとり

拝復

益御多祥之段奉

慶賀候さて本日幸

便を以て占作料

殘金參百円御送

付下され御手数奉

謝候箱既に出来致居候

間箱書の上更に荷箱

調製早速郡駅

へ向け発送可仕候

箱書の仕様も御使

の仁より拝承仕候間

御申聞の通可仕候

先は御返事迄

如此御座候

草々頓首

九年

一月廿四日

香取秀真

寺田大雅 御許



古泉千樫



32 歌集『利根川』のお礼

拝啓 其後御無沙汰仕候
時々御上京の由御面晤の期無之
遺憾ニ存候歌集利根川難有く
拝受仕候表紙が非常によく出来て
居ることうれしく候歌はまだよく見ず
只読むとはなしに幾度も繰り返し見て居り候貴詠を
のぞいては全くつまらぬ様に思はれ候こんな中に
貴詠のあること不思議とや可申候何れよ
く読みて愚見申上度不取敢右御礼迄勿敬具
葉書にて失礼 五月二日
利根川の字もよい不折はやっぱりうまい

31 『アララギ』の発行費拝受のお礼

拝復 先日の洪水
御地もひどかりし由御察申上候
アララギ発行費として
金七円五十銭御恵送被下
難有拝受仕候此際
誠に恐縮の至ニ存候
伊藤先生水害のもやう
早速御知らせも仕らず
御許被下度候
近日御上京の由久しく
御目にかゝらず候今度ハ
御目にかゝり度候
十九日子規忌歌会
に御出でなされては如何にや
不取敢御礼申上度
如此ニ御座候

九月十二日 幾太郎
二百廿日 極めて静かな日和也
寺田賢台
侍史
勿々敬具



斎藤茂吉



33 病氣お見舞いと長塚節の 短冊借用のお礼

謹啓
御病氣のよし御自
愛の程御願奉り候
糖尿病は食療
実到大切ゆえ科
学的ニ御やり下された
く貴堂は抜目な
いと存じ候へども是
非左様願奉り候
杏雲堂 佐々博士
大学稲田内科 坂口博士
等は大家ニ御座候
もし、まだならば紹介
かき申すべく候呉々も
御養生奉願候
○長塚氏短冊非
常ニ感謝奉り候。
実に感謝奉り候。
目下、全集で小生
全力をそそぎ居り候。
小生も火事以来、ふ
運つづきニ候ひしも
神明の御加護ニよつて
どうにか運ニ向ひ候
これより奮闘仕るべく
候御自愛專一。
糖尿病はあまりごろ
ごろしている事わろし。
6/V 1926 齊藤茂吉 拝
寺田大人 玉案下



佐佐木信綱



35 憲の歌への添削

今年もはや今宵
ひと夜と相なりさま／＼
おもひ出し居り候、さほる
ことありて御無音にのミ
打過ぎ候何も拝顔
可申述候
十一日哥会のごろ御上
京もあらはよろこはしかるへく候
折角よき年をおむかへ
あらほしく候まつは右のミ

寺田様

早々頓首
佐々木生

(別紙)

十一月課題咏草

菊

白菊や

黄菊や露の

美しき

唯わか歌の

ひくきを

耻ぬ

香そ高き

黄菊白菊

美しう

朝露姫は

花の御座に

※下句よし

憲

※の行と○は朱書き

34 寺田憲の子供誕生のお祝い

いとけなき君御すこやかならむと

喜上候御名何と御つけにか

祝のうたさし上たく

心の花にものせ置

たく候まゝ

御一報あらまほしく候

家内よりよろしく

与謝野鉄幹

36 雑誌『アララギ』の感想と
短歌の将来に関する私見

啓上

このほどは十年ぶりに

お逢ひ致しよろこびに心躍

り候ひきへだてなく小生の詩

に関する管見を御聴き被下候

御雅懷に敬服致候

曙覽翁の風の歌は小生が童

形の頃より父に教へられて諳

んじ居りしものに候へば珍しき

直筆を頂戴致候事何か因

縁のあるこゝち致候立派なる表装

まで被直候御蔵幅を御割愛被下候

御芳志御礼申述候二詞を知ら

ず候

別に同翁の短冊二葉をも御

添へ被下難有存じ候

アラゝギ初めて拝見致候中の作者

たちの摯実なる態度ハ羨しき

ほどに存じ候ただし例の標準

のちがひよりなるべけれど何れの作

も同じ色合にて個性の発露の

いちじるからぬは残念に存候万
葉の或る一部（むしろ手本とは成らぬもの）

をのミ眼中におきて万葉詩人

の全精神を汲まれぬはもの足

らずとおもひ候万葉の歌は今日

から見れば平民的なやうに見ゆ

れども当時においてハ第一流のハイ

カラであり貴族的（精神上の）作品

に候此点を我々は万葉より学

ばねばならず候明治には明治の

複雑にして生氣に富む感想

情緒があるに係らず其れを殺

してまで万葉の技巧に迎合す

る理由なしと存じ候アラゝギの

趣味ハ勿論詩の一部として永

久にあり得るものたるは小生も認

め候へども他の広大なる範圍

を忘れてはあまりに単調に候若

し万葉の詩人をして今に生れ

しめ候はば決してアラゝギの趣味

にのみ満足せざるべしと存じ候

小生はアララギの諸詩人を敬重し

今の片々たる多数の謂ゆる

新派歌人の軽俳なる態度

を喜ばぬ一人に候故特にアラ

ゝギの諸君の覚醒を望む心の

切なるを覚え候決して自分の

歌が尤も進歩せりとか申す慢

心から言ふのには無之候小生や

荊妻の作ハ皆過渡期の所産

にして識者より見候はば疵も厭

味も似非歌もあまた候べし小生共

は一生を挙げて之を正し度し

と努力致居候毛頭他を罵る余

裕も自負も無之候自他の個作

を互に尊重してその長所をの
み發揮し足らざるは共に補はむ

事を祈り候

茂吉君が荊妻の作のひ批難ハ

その理由に当らぬ所もあり当れる

所も有之すべて承引致しかね候へ

ども拙し歌に成り居らずと云ふ

結論ハ同感に候彼の二首の如き

は初めより自負の作には無之此

度の「佐保姫」にも採り居らぬ

駄作に候（かの批難中ネルは新聞社
にてヌルとある所を誤りて植えしに候）

茂吉君の結論に全く降参せ

し事を御序に御伝へ被下度候

御作拝見の上朱を加へ候御赦し

願上候

御上京の節ハ御来話被成下度

小生の拙作に就て御評をも御聴

かせ願上候、艸々不一

五月二十六日

与謝野寛

寺田雅兄 御侍史

37 『明星』への出版費謝礼

拝復

御懇書奉謝候猶又金貳円也明

星出版費中へ御寄贈被下候

義忝く奉存候何れ第三号の紙

上に於て各社友へ披露可致候

別紙之句詠草中の佳什ハ

併せて第三号へ掲載可致候

先は右御挨拶まで如此に御座候

草々

五月十四日 与謝野寛

寺田 詞盟 机下



高橋刀畔



38 銚子で避暑中の憲へ送った歌

毎々の御手紙

いつもながら厚友誼ニ

感謝の外無之候

腰折三首よろしく御斧正願上候

松青く

砂白きところ

君とゝもに

歌かたりせは

楽しならまし

酷きむこき

屍にすかり

我脊はと

打泣く

をミな

涕にたつ

(左から右へ記す)

君ますと

おもへは

こひし

君の

さま

藻の香

波の音

なほ

しるく

して

刀畔

39

竹柏の大会で寺田憲と会えず、
残念だったことについて

萬都の花

一時に開き申候今日は

無論御来会の事と存居り

候処高柳君より

御令嬢御病気の

趣驚入候其後

御経過如何に候や

御案し申し上候

折御保養

專一と祈入り上候

桜井君林君よりもよく申出候



牧野富太郎



41 ナンジャモンジャの木の写真お礼

桜花の好時節

と相成候処ふ相

変の御清適欣賀之

至ニ奉存候然れば預

て御配慮被遣候処

之ナンジャモンジャの

複写御出来之由にて

ワザ／＼御惠贈ニ預り

誠ニ難有奉拝謝候

これにて愈々昔之姿

を世人ニ知らしむるこ

と出来往事を偲ぶ

徴を得て此樹ノ為め

誠ニ喜ばししき事ニ

御座候

別封小生彼の「科学知

識」ヘナンジャモンジャの事

書きし后間もな

く書きし当時の「週

間朝日」巻部進呈仕候

当時の知事を間違へ有吉(ヨシ)

とせしハ池松之誤りニ候

先ハ右御礼申上度如此

ニ御座候 草々不一

大正十五年四月十四日

牧野富太郎

寺田賢 台

梧下

御惠贈之ナンジャモンジャ旧態写真は折を得て

我植物研究雑誌へ発表可仕と存じ居

候若し又彼のイヌマキの写真出来の節ハ

何卒一枚御惠み被下度御願ひ申上置候

「近代文学を支えた寺田憲とその周辺」展示資料一覧

No.	資料名	内容・備考	寺田番号	年代・所蔵など	形態
1	通い徳利	「寺田蔵」	—	昭和初期	陶器
2	通い徳利	「銘酒香取」	—	昭和初期	陶器
3	一升瓶	五人娘	—	平成21年	ガラス
4	一升瓶	香取	—	平成21年	ガラス
5	寺田家銅版画	日本博覧図	—	明治27年	パネル
6	寺田本家写真	—	—	令和6年10月	パネル
7	寺田家の経営帳簿類	無尽掛帳、判取帳など5点	471	明治～大正	冊子
8	神崎明神の図	『利根川図志』第5巻より	—	安政5年	パネル
9	わかば集	文人たちの短歌の短冊集	445	明治～昭和	折本
10	『馬酔木』	5冊	435	明治39年	冊子
11	寺田憲肖像写真	遺影（50代）	—	昭和10年代カ・寺田家所蔵	パネル
12	寺田憲が使用した文机	幅152cm、奥58cm、高30cm	—	桐製	木製
13	伊藤左千夫書簡	近況報告と歌集『利根川』の提供依頼	10	明治39年3月26日	書簡
14	伊藤左千夫書簡	茶室建設費の借用依頼	444	明治43年4月5日	卷子
15	伊藤左千夫葉書	歌集『利根川』の感想	35	明治42年4月28日	葉書
16	左千夫・節・憲の写真	神崎神社：山武市歴史資料館提供	—	明治38年6月6～9日	パネル
17	神崎神社写真	—	—	令和6年10月	パネル
18	夏目漱石書簡	伊藤左千夫『野菊の墓』の感想	409	明治39年12月29日	額
19	土屋文明書簡	金子拝受のお礼	43	明治42年10月31日	書簡
20	土屋文明書簡	第一高等学校の学年試験の落第を報告	318	明治43年7月12日	書簡
21	土屋文明書簡	長野県の校長職を辞して東京に戻ったことの報告	349	大正14年10月16日	書簡
22	土屋文明書	寺田憲の歌碑：神崎神社碑文	447	昭和53年10月	掛軸
23	寺田憲の歌碑（神崎神社）	—	—	令和6年10月	パネル
24	長塚 節葉書	雑誌『心の花』受贈のお礼	113	明治39年10月4日	葉書
25	長塚 節葉書	九州医科大学で治療報告	152	大正3年7月21日	葉書
26	長塚 節葉書	九州で療養中の近況を報告	153	大正3年11月18日	葉書
27	香取秀真書簡	銘酒「香取」の代金支払い	368	大正5年11月29日	書簡
28	香取秀真書簡	小銅仏像のお礼	370	大正9年1月2日	書簡
29	香取秀真書簡	鴟鴞占の作料残金受けとり	371	大正9年1月24日	書簡
30	鴟鴞占（しきょうゆう）	香取秀真作（外箱有）	—	大正8年・寺田家所蔵	銅製
31	古泉千樞書簡	『アララギ』の発行費拝受のお礼	306	明治43年9月12日	書簡
32	古泉千樞葉書	歌集『利根川』のお礼	299	明治42年5月2日	葉書
33	斎藤茂吉書簡	病気お見舞いと長塚節の短冊借用のお礼	427	大正15年5月6日	書簡
34	佐佐木信綱葉書	寺田憲の子供誕生のお祝い	181	明治39年11月12日	葉書
35	佐佐木信綱書簡	憲の歌への添削	185	明治40年12月31日	書簡
36	与謝野鉄幹書簡	雑誌『アララギ』の感想と短歌の将来に関する私見	416	明治42年5月26日	書簡
37	与謝野鉄幹書簡	『明星』への出版資謝礼	165	5月14日	書簡
38	高橋刀畔葉書	銚子で避暑中の憲へ送った歌	443(4)	明治38年8月11日	葉書
39	高橋刀畔葉書	竹柏の大会で寺田憲に会えず残念だったことについて	443(12)	明治39年4月8日	葉書
40	牧野富太郎書簡	ナンジャモンジャの木の写真お礼	382	大正15年4月14日	書簡
41	ナンジャモンジャの木写真	神崎神社（香取郡神崎町）	—	令和6年10月	パネル
42	『寺田憲遺歌集』	—	—	昭和54年3月	冊子

【協力者】

開催にあたり次の方々にご協力いただきました。あつく御礼申し上げます。

株式会社 寺田本家

山武市歴史民俗資料館

青木 司 (香取市教育委員会)

秋山 笑子 (当館共同研究員)

(敬称略)

【参考文献】

- ・千葉県立上総博物館 『下総神崎町寺田家文学資料(一)(二)(三)』
昭和51年、52年 同館
- ・高崎繁雄 『下総神崎町寺田家文学資料集成』昭和54年 千葉県立上総博物館
- ・寺田 憲 『寺田憲遺歌集』昭和51年 私家版
- ・藤沢周平 『白き瓶―小説長塚節』昭和63年 文春文庫
- ・田邊彌太郎 『房総歌人伝』平成元年 単独舎
- ・石下町地域交流センター 『長塚節と友人たち』平成6年 同センター
- ・米谷 博 『寺田憲―下総神崎の実業家歌人―』(『利根川文化研究』6号
平成6年 利根川文化研究会)
- ・石川 誠 『常総地方の近代短歌人達―伊藤左千夫・長塚節・寺田憲など―』
(『茨城県史研究』80号 平成10年 茨城県)
- ・石川 誠 『近代を詠った歌人たち』平成11年 砂子屋書房
- ・飯田 洋 『佐佐木信綱を巡る人々』平成29年 私家版

令和六年度トピックス展

「近代文学を支えた寺田憲とその周辺」解説書

編集・発行…千葉県立中央博物館

〒260-1868

千葉県千葉市中央区青葉町九五五-二

発行日…令和七年(二〇二五)三月 九日

——佐佐木信綱に學び 長塚節 伊藤左千夫との親交は
遍く人の知る所也
(神崎神社 寺田憲歌碑 土屋文明書より)

